



TITLE:

秋の分科会に於けるI.M.の報告(<特集>現在我国の物性物理学の研究体制について-そのII共同利用研究所の問題を中心に-)

AUTHOR(S):

山田, 修義; 永井, 克彦; 大成, 逸夫

CITATION:

山田, 修義 ...[et al]. 秋の分科会に於けるI.M.の報告(<特集>現在我国の物性物理学の研究体制について-そのII共同利用研究所の問題を中心に-). 物性研究 1969, 13(3): 198-200

ISSUE DATE:

1969-12-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/87240>

RIGHT:

秋の分科会に於けるI. M. の報告

東大理 山田 修義

東大教養 永井 克彦

” 大成 逸夫

(I) I. M. を開催した目的

自然現象の不可思議さや美しさに強い好奇心を持ち、自然科学研究という知的活動にたずさわる、或いはこれからその道に進んで行こうとすると、研究活動の場や、実践の成果が資本や種々の権力によって掌握されている場合がある。様々な障害が生じてくる。この障害に重きを置かずにすませる方法はある。それは自己の精神活動を狭い専門領域におし込めて、その道のエキスパートになり、それを持って自らの全人格と思ひこむことである。しかし、自然科学研究者や技術者が近年急激に増大し、社会的な一つの層を形成している現在、個人的な主観を持って事の判断を行うこと程危険なことではない。実際米軍から金をもらっても研究を行わんとする考え方、或いは全研究者の十分な討議に基かずに大型プロジェクトを推進したり、共同利用施設を運営する考え方、又劣悪な条件の下で研究を続ける研究者を無視した研究体制、そして研究の在り方そのものに批判的な思考を持たずに「人民の為になす科学」などと短絡すること、等々は正に資本の増巾過程を自ら補完することに他ならない。我々はどれ一つを取ってみても困難な問題に直面している。その中から二つの問題：「共同利用研究所の現状と問題点」及び「軍関係者と物理学会」を取り上げた。そしてまず問題に関する正確な情報を得る事を目的として今回のI. M. を計画した。準備の不完全さと討議時間の不足から当初の目的を達したとは言えない。しかし以下の三氏の報告や意見の記録等が今後の建設的な運動の一助になれば幸である。

(II) レポート及び討論

(A) 共同利用研問題に関しては、物性研について森垣和夫氏に、基研について長岡洋介氏に報告して戴いた。森垣氏は物性研設立当初の理念に照して現在迄

どの様に経過して来たか、そして現時点に於て如何なる問題が生じているかを説明した。戦後の物性研究の立ち遅れを克服する為、貧しい中から金を出し合っ
て物性研究のピークを作るという目的で共同利用研として発足した物性研は、
(I) 共同利用研としての機能に動脈硬化の状態が現われていること、及び
(II) 東京大学改革準備委員会の「共同利用研を東大から切り離す」という案
が出された事に関連して、東大と物性研との関係、更に全国の研究者に対する
物性研の現在の在り方に大きな問題がある事を指摘した。(I)の原因は人事交流
の停滞(所員に任期制が無い事、外来研究者が偏っていること等)が研究の固
定化(20構座の看板通りにはなっていない)を招き、更には中央集権化(協
議会は非公開)に傾いている事にその一端がある。(II)の問題は物性研がたまた
ま東大に附置されているのを切り離されると移すのに困るということではない。
現在の物性研は全国物性研究者の意向に基いて機能しているというよりはむしろ
東大の研究所として機能している側面があること、それ故共同利用研が各大
学から独立することは形式的には望ましいが、過去の十分な批判的検討を基盤
にした内実を確立せずに安易な改革を唱っても、中教審の近代化路線に乗った
文部省型モデル研究所に陥入る恐れが多分にあることである。

長岡氏は基研の運営機構と各委員会の役割を説明し、基研運営の京都大学と
関連する部分には「相互尊重・相互不可侵の原則」があることを紹介した。そ
して、基研の設立・その後の発展は湯川先生個人の寄与が大きく、間近に迫っ
た湯川所長の退官に関していくつかの意見があることを述べた。例えば、
○京都大学のきまりに従う必要はない、○来年はやめないで実質的な所長を続
けて欲しい、○湯川先生個人に隠れて研究が行われてよいか、等々。

以上両氏のレポート(別稿に詳説されているので参照して戴きたい。)の後
討論を行った。議論は物性研に集中した。以下に要約のみ記す。

◎物性研と基研の違い

人事については前者の staff は東大の併任であるが後者は必ずしもそうで
ない。そして前者に於ては人事を内部で決めておいて人事委にはかる、つま
り共同利用委員会の力よりも所員会の力の方が強い。研究会については、前
者に於ては提案者の中に必ず物性研内部の人が入っていないなければならない。

又基研は molecule 型を割合自由に(基研の外でも可)作れるが、物性研で

はそれが無い。

◎物性研や基研にとられない型の共同利用研は考えられないだろうか？

例えば、旅費や文献復写費だけを持つ、従って共同利用の仕方を決めずに、その費用でエライ人を地方に呼ぶことが出来たり、手元にない文献を復写したりすることが出来るような。

◎物性研が共同利用研としての性格を失っている 2 . 3 の例

○任期制が無い。○人事（特に助手）の供給ソースが偏ってきている。○あるスクールの私物化による研究内容の偏りの傾向。○東大所属という意識の存在。○東大の評議会と共に所長が退官した。○或る大学は大学院生の収容能力が無い為に物性研に送り込んでいる。

◎物性研究と共同利用研の在り方

○境界領域を育てるべきである。○物性研究にとって基研は如何なる役割を持っているのであろうか？ ○共同研究の形は次次に変り得るから十分に対応出来なければならない。○研究費は核研の様にドンブリ勘定にすべきである。○ top level の人を集めて物性の細分化を防ぐ。○足りない所や地方を伸ばすことにも役立つ可き。○共同利用は純粋に physics の要求から行い可きである。

◎物性研拡充計画に関して

○共同利用委員会は形ガイ化しているのではないか？ 例えば研究内容や将来の内容の discussion も余りなく、外部からの批判も少い。○物性研のみでは共同利用は完全でなくなる（例えば金研のマグネ）○物性研の拡充には反対：金は有ってもピッコ（一人歩きしない）方が良い。○物性研の拡充は物小委のことなのに、物小委でとりあげることにならなかった。

(B) 軍関係者と物理学会の問題に関しては白鳥紀一氏が報告した。議論に必要な時間が余りにも少なかったので、以下に白鳥氏の報告のみを掲載させて戴く。